

盲目の公爵令嬢に転生しました 2

# 登場人物紹介

## スティーブン

アリシアの父。アリシアのことは  
目に入れても痛くないくらい  
溺愛している。

## マクスター先生

魔法学校の教師。  
重度の魔法オタク。

## ケイト

アリシアの侍女。  
幼い頃からアリシアの  
面倒を見ていて、  
彼女のよき理解者。

## エミリア

カイルの学校の友人。  
新進気鋭の男爵家の令嬢。  
発明家の顔も持っていて、  
一部の学生や市民から  
猛烈な支持を得ている。

## カイル

アリシアの婚約者で第五王子。  
アリシアのことを溺愛している。  
やや腹黒く策士な一面もあるが、  
優しく友達思い。

## アリシア

前世の記憶を持つ、盲目の公爵令嬢。  
明るくて超前向き。  
魔法を使えるようになるため  
猛特訓中。

## ミハイル

カイルの学校の友人。  
男爵家の子息で  
金勘定に厳しい。

## エリック

カイルの学校の友人。  
騎士団長の息子で  
やや脳筋。  
剣と魔法の腕は一流。

## カーライル

カイルの学校の友人。  
公爵家の嫡男で、アリシアの従兄。  
軟派な外見に反して、性格は真面目。  
カイルにも一目置かれている。

## アラミック

カイルの学校の友人。  
隣国からの留学生。  
人当たりが良く柔軟な性格。

## プロローグ

「アリシアお嬢様、お時間です」

私は、幼い頃から世話をしてくれている侍女のケイトの声で目を覚ました。目覚めるといっても私は生まれつき盲目で、目は全く見えない。だから今が朝かどうかもケイトに言われなければわからない。

「ありがとう、ケイト」

私はケイトに声をかけると、勢いよく上半身を起こす。

私の名前はアリシア・ホースタイン。この世界では公爵令嬢だ。不思議ではあるが、生まれた時から前世の記憶が備わっている。

前世では、日本に住む十八歳の女の子だった。残念なことに、酷い喘息で人生の大部分をベッドの上で過ごし、若くして死んでしまった。

でも、今際の際で私は願った！絶対に生まれ変わってやると！  
そして、見事に転生を果たして今がある。

但し、転生先のアリシアは生まれながらに目が見えず、あたふたしたのは言うまでもない。

そんな想定外なことから始まった第二の人生だったが、生まれ落ちたこの世界は、私にとって素晴らしいものだった。

私を溺愛する優しい両親に恵まれ、仲の良い幼馴染かつ、この国の第五王子カイルとは十歳の時に婚約した。

私はカイルのことが大好きだし、カイルも同じように思ってくれている。

更にこの世界には魔法があった。残念ながら目が見えない私は上手く使えないが、確かに魔法は存在する。

それでも私はワクワクが止まらなかった。

そんな幸せな人生に不穏な出来事が起こり始めたのは、十六歳の時だった。

カイルが通っていた学校を訪れた際、何者かに襲われたのだ。幸い怪我はなかったが、目の見えない私には犯人がわからなかった。

そんな中、カイルの側近候補だったエミリア・フレトケヒト男爵令嬢と出会った。

初めは仲良くしてくれたが、次第に私への嫌がらせが始まり、変な噂を流すようになった。

信じられなかったし、信じたくなかったのだが、日に日にエスカレートしていくエミリアさんの行動に疑問を感じた私は、カイルと協力して彼女を調査した。

その結果、エミリアさんは私をターゲットに、何かを企んでいるらしい。

更に私は、エミリアさんが私と同じ転生者ではないか？ ということにも気が付いてしまったのだ。

私はカイルに、自分が前世の記憶がある転生者で、エミリアさんも同じではないかと打ち明けることにした。

カイルが信じてくれるのか不安だったが、彼は私を信じてくれて、共にエミリアさんの企みを暴いていくことを約束してくれた。

それだけで、私の心は軽くなった。

その後のカイルとの……キスを思い出して、私は思わず頬に手を当てた。

「アリシアお嬢様、お支度の準備が整いました」

「あっ、え、ええ、わかったわ」

ケイトの声で現実に戻った私は、慌ててベッドから起き上がったのだった。

## 第一章 アリシアと魔法

・・◆公爵とアリシア◆・・

ある日の昼下がり、私とカイルはガゼボで通信機という、前世でいうところの携帯電話のような魔道具を使って、パパさんことホースタイン公爵と連絡を取っていた。

数秒呼び出すと、すぐに聞き慣れた声が響く。

「アリシアかい!？」

パパさんは今、王宮の執務室にいるはずだ。

相変わらず慌てたように話すパパさんの声を聞いて、私は頬を緩める。

パパさんは私を溺愛するあまり、いつも過剰に心配ばかりしているのだ。

「はい、お父様。アリシアです」

しばらく沈黙が続いた。

「お父様？ 聞こえていますか？ お父様？」

「ああ、ごめんよ。アリシア。お父様はここにいるよ。相変わらず可愛い声で、お父様は感動して

しまったよ」

「お父様ったら！ お元気でしたか？」

「もちろん元気だよ！ 元気が無くても、アリシアの声を聞けば元気になる」

「まあ、ふふふ」

私とパパさんのやりとりで痺れを切らしたのか、隣に座っていたカイルが私の肩を少し引いて話し出した。

「公爵、お久しぶりです。カイルです」

カイルの声を聞いて、パパさんの声が少し低くなる。

「これはこれはカイル殿下、ご無沙汰しております。今日は一体何事ですか？ ハッ！ もしや、またアリシアの身になにかあったんじゃない！」

「お父様！ 違いますわ。安心なさって？ 今日は、あの件のご報告とご相談がありますの。お時間を頂いてよろしいですか？」

「ああ、わかったよ。三十分くらいなら大丈夫だよ」

私はパパさんに、マチルダさんとエリックさんが報告してきたことについて話した。

エリックさんはカイルの側近候補で、学校ではカイルと同じ執行部のメンバーに選ばれている。

エリックさんは騎士団長の息子で、伯爵家の三男でもあり、私の友達のマチルダさんとは婚約者同士だ。マチルダさんは騎士団の副団長の娘で、男爵令嬢だ。

この二人にはエミリアさんの調査で色々助けてもらっていた。

「なるほど、それじゃあエミリア嬢自身が、王都でカイル殿下と自分が仲良くしているという噂と、学校におけるアリシアの悪評の両方を流したということかい？」

「はい。ただ、状況証拠ばかりで物証はございませんの。それに、私はエミリアさんに嫌われてしまったようです。折角仲良くしてくれたのに……とても残念ですわ」

エミリアさんとのやり取りを思い出すと心が重くなる。

「アリシア……可哀想に。大丈夫かい？」

「はい、ただ、なぜそんなに私を嫌うのかわかりません。なにかをしようとしているようなんです  
が……」

実を言うと私は、エミリアさんが私と同じ転生者だから、私を敵視しているのではと考えている。しかし、カイルと相談した結果、私の前世や転生については、まだ両親に話さないことにしたの

だ。なんと信じてもらえない話なので、余計な心配をかけたくなかった。私の話を聞き終わると、パパさんは納得したように答える。

「なるほどね。でも、お父様は安心したよ。この前カイル殿下にあの男爵令嬢について相談したとは聞いていたけれど、アリシアが未だに一人でどうにかしようと思ってるんじゃないかって心配だね。やはり限界はある。それはそうと、危ないことはしていないだろうね？」

「……はい。もちろんですわ」

パパさんの心配そうな声に、私は少し考えてから答えた。

怪我もしていないし、襲われてもないもの。危ないことはしていないわよね。

すると、パパさんは「しょうがないね」と苦笑して、パンツと手を鳴らした。

「よし！ では、これからお父様の報告を始めようかな？」

「えっ？」

「え？ じゃないだろう？ アリシアが襲われたのに、お父様がなにもせずにいるとどうして思ってたんだい？ この前の話から、フレトケヒト男爵家について調べてみたんだ」

まだ完璧ではないがと断ってから、パパさんは今現在わかっている男爵家の動きや思惑について話してくれた。

フレトケヒト男爵家の成り立ちから最近の成功までを纏め、その中でも『発明』が世に出るから動きについて詳しく調査していた。

「というわけで、今や知らない者はないと言っても過言ではないという発明が、フレトケヒト男爵

家から生まれ続けているんだ。トランプくらいなら可愛いものだったが、やはり通信機を発明したことで貴族内での立場が変わったな。野心のある上級貴族がこぞってフレトケヒト男爵を厚遇し始めたんだ」

「お父様、それはなぜですか？」

「勿論、資金が大きいよ。身分は高くとも資金繰りが苦しい貴族は沢山いるからね。今やフレトケヒト男爵はこの国でもかなり上位の資産家だよ」

「……そうなんですわ」

「でも、それだけじゃない。今アリシアから聞いた話で、疑念が確信に変わったよ」

パパさんは硬い声で言った。不思議に思った私は、小首を傾げて尋ねる。

「なにがですか？」

「情報だよ。フレトケヒト男爵家には情報が集まる。そう言われているから更に人が集まり、そしてまた情報が集まる。まるで学校でのエミリア嬢のようだよ。もしかすると、彼女は発明だけではなく、男爵家の運営にも深く関わっているのかもしれないな。だって商人達があがめる程なんだろう？ それは即ちエミリア嬢の側にいれば儲かるということさ。確かになにかを企んでいても不思議じゃないな」

パパさんの話を聞きながら、話がドンドン大きくなっていくことに焦りを感じる。

そうなのだ。それ程この世界における『発明』は人々に影響を与えてしまう。

確かにエミリアさんは、この世界でなにかをしようとしているけど、それはこの国を変えるよう

な大きなことなのかしら？

「お父様、ちよつとお待ちになつて！」

私は、話を続けようとするパパさんを思わず止めた。

「どうしたんだい？ アリシア」

もし私が、エミリアさんの立場だったら、前世の便利なものをこの世界に広めたいとは思わうらう。

でも、今までのエミリアさんの言動を考えると、彼女の行動理念はもっと単純な気がする。

興味本位であったり、自分の好き嫌いであったり、ただただ自慢しくて知識を披露しているように思える。

前世ではもっと、もっと、危険で物騒なものが沢山あるのだ。それこそ、銃なんて可愛いと思えるようなものがいくつも思い浮かぶ。

「お父様、フレトケヒト男爵はわかりませんが、エミリアさんに関してはもっと単純な目的があるんじゃないかと思えますの」

「それはどうしてだい？」

私はパパさんに、エミリア・フレトケヒトという人の印象を説明する。

「例えば、お父様が仰る通り、エミリアさんが洗脳やお金で人々を取り込んでいると考ええると、今この学校にいる必要はありませんわ。こんな小さな世界どころか、この国の根幹に影響を与えられるんですもの。それなのにエミリアさんはまだ学校にいます。それはこの学校の中でしか成しえ

ないなにかがあるからだと思えますの。それは恋愛であったり、嫉妬であったり、もっと自分本位なもの……」

その時、ずっと黙っていたカイルがおもむろに口を開いた。

「公爵、今の話を聞いて、そして、実際にエミリアと友人として接していて感じたことを言わせていただきます。まず、第一にエミリアは実家を快く思っていないかもしれません。なので、エミリアが男爵家を利用するというより、男爵が彼女に固執しているという方がしっくりきます。実家からしつこく連絡が来ると嫌そうにあしらっていましたし。第二にアリシアも言っていました。彼女が国を変えるとか、家がどうか、志を持って行動するというより、もっと目先の欲求に忠実なタイプです」

カイルが話し終わると、暫し沈黙が訪れる。

「なるほど。君たちはエミリア嬢の目的は未だ学校の範囲内にあると考えているということかな？」

「はーん」

パパさんがゆつくりと確認する。その言葉に私とカイルは手をキュッと握り合つて頷いた。

「わかったよ。では、エミリア嬢については二人に任せる。ただ、今のところ彼女と男爵家は目的を共にしていないかもしれないが、今後はわからない。早めの対処が必要だよ？」

パパさんは冷静に状況を分析して助言してくれる。すると、今度はカイルが少し考えながら話し出す。

「公爵……。僕に策があるのですが、聞いてもらえますか？」

「なんですか。カイル殿下」

「僕が考えている策は、一度エミリアの思惑に乗ってみるといえるものです。王都の噂やアリシアへの襲撃、その後の嫌がらせの数々……そこから得られる結果は、僕とアリシアの不仲、もしくはアリシアの失脚にあると思います。それならば、僕達が不仲だと思わせることで、エミリアが次の一手を打つ可能性が高まる。今のままでは、残念ながらエミリアがいつ動くかわかりません。もしこの策が上手くいけば、こちらの罠にはめることも、先手を打つことも可能です」

私はカイルの言葉に驚き、息を呑んだ。

「なるほど、後手後手になっている現状を変えるということですね」

「はい。そのためには僕からアリシアに婚約破棄、もしくはそれを匂わすようなことをする必要があります。本当に不本意ですが、それが確実だと思います。それをエミリアが信じてくれれば、ならんかの行動を起こすでしょう」

カイルはそこで一旦言葉を区切り、私の肩をしっかりと抱きしめる。

「アリシア、これは嘘だからね！ 僕がアリシアとの婚約を破棄するなんてあり得ないことだからね？ 絶対に信じないでくれよ？」

「わかったわ。でも、あの、カイル、それでエミリアさんが動かなかつたらどうなるの？」

カイルの話聞いて、そう確認せずにはいられなかった。不安な思いが伝わったのか、彼はヒシツと私を抱きしめた。

「これが失敗したら、次は王都の噂通りに、僕がエミリアに近づいて色々聞き出すのが一番いいと

思う。でも、僕はそれだけはしたくない。嘘の婚約破棄や不仲ならなんとか！ なんとか！ 我慢するけど、僕がアリシア以外に好意を持つ振りだけは絶対にしたくない!!」

「カイル？」

語気を荒らげ、私をギューギュー抱きしめるカイルに困惑していると、パパさんのため息が聞こえた。

「まあ、いいでしょう。アリシアが辛い目に遭うのだと思うと、お父様の胸は張り裂けそうだけれど……アリシアはどうか？ 耐えられそうかい？」

「確かにカイルから婚約破棄されるのは嫌ですわ。でも、今は頑張ります！ なんならエミリアさんが仰っていたように、高飛車な令嬢の振りだつてできますわ」

「頼もしいね。しかし、突然婚約破棄だと騒いだら不自然かもしれない。カイル殿下、不仲になるきっかけは必要ですよ」

「そうですね。少し考えてみます」

そうして、私達はパパさんとの通信を終わらせた。

数日後、未だに私たちは不仲になるきっかけを掴めずにいる。

それに最近、なぜだかエミリアさんが私に近寄ってくれなくなってしまった。

話しかけようと近づくと、彼女の取り巻きの方々がささと庇つてどこかに移動してしまうのだ。彼女が本当に転生者なのか確認しようにも、こんな調子で上手くいかず、膠着状態が続いていた。

そんなことを繰り返し、私はどうしたらエミリアさんと話せるかを考えながら、マスター先生の補習を受けるためにケイトに手を引かれて教室に向かっていた。

マスター先生は魔法学の先生で、パパさんの後輩でもある。パパさんからのお願いで、魔法が使えない私に補習してくれるのだ。

「アリシア嬢」

突然話しかけられて、私は振り向く。

「えっと、その声はアラミック様ですか？」

「はい、その通りです。アラミックです。しかし、凄いですね。少し声をかけただけで私だとわかったんですね」

アラミックさんの感心したような声が聞こえて、頬が少し熱くなる。

彼は隣国からの留学生だ。カイルのお友達でもあり、一緒に執行部を運営している。

少し軽薄な感じはするが、私がチャリティーイベントをした時に的確なアドバイスをくれたり、サポートしてくれたりした。とても優秀で優しい人なのだ。

「そ、それが目の見えない私には必要な力ですの。当たり前のことですわ」

「いや、それにしても素晴らしいですよ。ところでアリシア嬢は、どちらに行かれるんですか？」

「えっと魔法学のマスター先生の補習を受けに行くところですよ。アラミック様は？」

「私ですか……。まあ、散歩……です」

歯切れ悪く答えるアラミックさん。少し元気がないみたいだ。

「そうですの？ でしたら、教室までエスコートしていただけますか？ まだ、教室までの道に慣れていなくて」

にっこり笑ってそう言うと、アラミックさんは「喜んで」と私の手をスッと引いてくれた。一連の動作はとてもスマートで、手慣れているとすら感じる。

確かに初めて会った時も、女性の扱いに慣れている感じがしたわね。

それでも、いつもの少し軽い感じがなく、声も沈んで聞こえたのが気がかりだった。

「アラミック様、お節介せつかいかもしれません、なにかありましたの？」

「え？」

「すみません、アラミック様の声に元気がないように聞こえてしまつて……。もしなにかお困りでしたら、力になりますわ」

「……では、歩きながら少し話してもかまいませんか？」

「はー」

そうして、アラミックさんは母国であるラングランド王国の話を、ぼつぼつと語り始めた。

アラミックさんの国はこの国の北に位置している。

現在、ラングランド王国が、その更に北にあるウオレイク王国から何度も侵攻を受けているらしい。そのため常に戦時体制を取っていて、治安が悪く、教育も遅れている。

現に、つい最近もウオレイク王国との戦いで友人が怪我けがをしたという連絡があつたということで、アラミックさんは心配だと肩を落としていた。



「そうなんですか……。それは心配ですね。隣国はそんなに政情が不安定なのですか？」

「ええ、残念ながらこの国のような学生生活は夢のまた夢です。そのことも、私が祖国の友人達に申し訳ないと感じるところでもあります。王と王太子が宥和政策などと言わずにもっとしつかりしていれば……」

アラミックさんが呟いた低い声に違和感を覚えるが、なにが引つ掛かったのかわからず首を傾げる。しかし、その違和感を振り払って、隣国に想いを馳せた。

すぐ隣の国がそのような状態だなんて……

ラングランド王国に暮らす人々を思うと、胸が締めつけられる。

「お気の毒に……。あの……。一日も早くお友達が回復されることを祈っております」

「ありがとうございます。一つだけ不躰な質問なのですが、アロシア嬢はカイルに上を目指して欲しくはないのですか？」

「上、ですか？」

「はい。私自身、カイルの優秀さに日々驚いています。それこそ王位を目指してもいいのではないかと思うくらい有能です」

「そうなんですね。ありがとうございます」

婚約者を褒められて嬉しくないわけがない。面映ゆさを覚えつつ、私は素直にお礼を言った。

「……しかし、カイルには野心がない。能力も環境も整っているのに、現状に甘んじているように見えてしまうんです。もちろん公爵位が悪いと言うわけではなく……カイルは王子です。王位を目

指さなくていいのでしょうか？」

私は彼のあまりに真剣な口調に、思わず立ち止まる。

「アラミック様は、カイルが王位を目指すべきだとお考えですか？」

「そういう道もあると考えます」

「でも、カイルは第五王子ですし、臣下として王太子様をお支えすることを楽しみにしていますわ」

「それは、貴女が……。いえ、すみません。今の話は忘れてください。どうも友人からの知らせで混乱しているようです」

そう言って、アラミックさんは私の手を引いてエスコートを再開した。

私も困惑してしまい、しばらくお互いの間に沈黙が落ちた。

「アリシア嬢、マクスター先生の教室につきました。余計なことを話してしまい申し訳ありません。カイルはアリシア嬢のような優しい心を持つ婚約者がいて、本当に羨ましい限りですよ。話を聞いてくれてありがとうございます」

アラミックさんは、私の手の甲にキスを落とすと、そのまま行ってしまった。  
手の甲に触れた彼の唇の冷たさが、なぜだか心をざわつかせた。

「おはようございます」

私は気を取り直して教室のドアを開けた。

「アリシア！ 遅かったじゃないか。今、迎えに行こうかと思っていたところなんだよ」

「おはようございます。アリシア嬢」

教室には既にカイルとマクスター先生が待っていた。カイルは私の側に近寄り、両手を柔らかく包み込む。

「カイル、ごめんなさい。少し遅れてしまったのね」

なんとなくアラミックさんについては言わない方がいい気がして、遅れたことだけを謝った。  
きつとアラミックさんも、あんなに気落ちした様子をカイルには知られたくないだろう。

「いや、アリシアが無事なら構わないよ」

「アリシア嬢も来たことですし、早速補習を始めましょう。今日も前回の続きで魔力を外に出して、魔法を発現させる練習をしましょう」

「はい。わかりました」

本当は私一人で補習を受けるはずだったのだけど、カイルにこの件を話したら、一緒に行くと  
言っただけで聞かなかったのだ。マクスター先生に相談すると、「女性の理想は父親だと言いますしね」  
と笑って認めてくれた。台詞の意味については、深く聞かないことにした。

「うー、えい！」

「アリシア。そんなに力まないで」

「アリシア嬢！ 何度言ったらわかるんですか!! 魔法は内なる力を使うのです！ 声の大きさは関係ありません！」

カイルの優しい声と、意外と厳しいマクスター先生の声が教室に響く。  
マクスター先生は魔法が絡むと人が変わる。

私のように生活魔法さえ使えない生徒は初めてらしく、どうにかして魔法を発現させようと躍起つらきになっているみたい。

先生が言うには、私の中に魔力は有り余るほどあるらしい。だが、その魔力は体の中を駆け巡るのみで、ちっとも発現しなかった。

私は、今度は声は出さずに、えいっと気合を入れる。うんともすんとも変化のない状況に、先生もカイルも困っているようだ。

「先生。本当にアリシアは魔法が使えるようになりますか？ 全然使えそうには見えないのですが……」

「おかしいですね。文献によれば、病気や怪我けがで盲目となった場合は、その後もそのまま魔法を使えるそうですよ。勿論、生まれつき目が見えないアリシア嬢には、当てはまらないですが……私は成功させたいです」

先生は、絶対私を実験の被験者と見ていると思ったが、声には出さずため息を吐く。

「アリシアお嬢様。大丈夫でございますか？ 少しお休みさせていただきましたきましょう」

ずっと側で控えていたケイトが、すかさず私の頬に冷たいタオルを当てて、椅子のある方に誘導してくれる。困り果てた私は、ケイトにも魔法について聞いてみた。

いつも息をするように魔法を使っているケイトなら、なにか気付いているかもしれない。

「ねえ、ケイト。貴女はなんでだと思う？」

「アリシアお嬢様の魔法が、発現しない理由でございますか？」

「ええ、魔法の概念は理解したし、先生が仰るおっしゃには魔力もあるようだし、すぐに使えそうなのに。やっぱり目が見えないとダメなのかしら？」

「お嬢様……。私の私見でよろしいでしょうか？」

落ち込む私を見かねたように、ケイトが話し始める。

「もちろんよ！」

「お嬢様の魔法には、魔法を使いたいという意思しか感じられないのでございます。生活魔法も防御魔法もやりたいことや願いが重要です。例えば防御魔法では自分の身を守るという気持ちが大切なのです」

「気持ち？」

「はい。私は自分に防御魔法をかける時よりも、お嬢様に防御魔法をかける時の方が、遥かに気合が入り願ひも強くなります。ですので、私自身の防御魔法よりも、お嬢様にかけている防御魔法の方が効力が強いはずですよ」

「そんな！ ケイトも自分自身にきちんと防御魔法をかけてほしいわ」

「わかっておりますが、防御魔法の基本は、守りたいという願ひでございます。私は、どうしてもお嬢様をお守りしたい気持ちの方が強くなっております」

ケイトの気持ちが嬉しくて、私は彼女の方に手を伸ばした。

「お嬢様が安全に過ごせますように」

ケイトが私の手を取って、祈るように願いを口にしました。

その途端、私の体に温かいものが流れてきて、ケイトの願いが、防御魔法を発現させたのだと理解する。

私も心の底から、幼い時からずっと一緒にいて、サポートしてくれている彼女の安全を祈った。

「ケイトが危ない目に遭いませぬように！」

すると、今までうんともすんとも言わなかった私の魔力が、ケイトを包むようにふわりと発現した。

「『アリシア（嬢）!!』」

「お嬢様！」

カイル、マクスター先生、ケイトがほぼ同時に驚きの声をあげる。

「一体どうしたんだい？　今はアリシアの魔法かい？　一体なぜ？」

「なにをしたんですか、アリシア嬢!?　これは大変な発見なんです！　詳しく状況を教えてくださいー！」

バタバタと近くに来て、ワーワーと言ってくるカイルと先生をスルーして、私はもう一度ケイトの手を握った。

「わかったわ、ケイト。魔法を使いたいとはばかり考えていたから、駄目だったのね。誰かを守りたいという気持ちが必要なね。私に足りなかったのは、魔法の先にある願いだったんだわ」

そう言っつて、私はケイトに向かって満面の笑みを浮かべる。

「お嬢様……」

ケイトが感極まったという風に声を震わせる。そんな彼女の手を更にきゅつと握りしめてから、私はカイルの方を振り向いた。

「カイル！　私やったわ！」

カイルが私の肩を掴み、勢いよく抱き寄せた。

「アリシア！　おめでどう！　でも、僕にもわかるように詳しく説明して貰えるかい？」

「わかったわ。ちょっと待ってね」

私は自分の中のイメージをなんとか言葉にする。

「えっと、今までは魔法を使いたい、発現させたいと思って練習していたの。なんのための魔法なのかについて全く考えていなかったのね。魔法を使うこと自体が私の目的だったの。でも、違うのよ。魔法に必要なのは願いなの！」

「そ、それは一体どういうことですか!!」

マクスター先生の興奮した声が、思いの外、近くから聞こえた。

「私のように魔法の発現さえできないと、『魔法を使いたい、なんでできないの?』としか考えられなくなってしまうのです。だって、みんなは普通に使えるんですもの。でも、それでは魔法は使えないのです」

「なんと！　それではなにが必要なのですか!？」

マクスター先生の興奮した声が響く。私は一旦息を吐き出し、落ち着いて話し始める。

「大きな違いは『願い』なのです。例えば防御魔法をかけようとしていた時、私は自分の身を守るということが具体的に想像できていませんでした。それよりも魔法や魔力に気持ち（か）が偏（かた）っていました。魔力を出そう！魔法を発現しよう！としか考えていなかったんです。スタンプの時も同じです。あれも私はできる限りの魔力を押し付けていただけなのです」

「なるほど。じゃあ、どうして今はできたんだい？」

私はカイルの方に顔を向ける。

「ケイトの安全を祈ったの」

「「え？」」

「私は、心からケイトが危険な目に遭ってほしくないなと思ったの。別に魔法なんて発現しなくてもよかったのよ。純粹に、ケイトの安全を祈ったら魔法が発現したみたいなの」

すると、マクスター先生がボンと手を鳴らす。

「そうか！魔法を使おうとか、魔力を出そうとかは考えなかったんですね！アリシア嬢が侍女を純粹に心配することで防御魔法が発現したと。これは興味深い!!」

先生はそれからブツブツと独り言を繰り返して、ノートになにかを書く音が響く。

「それじゃあ、アリシアは魔法を使おうと思わなかったら使えたということか」

「そうね。もちろん昔からいろいろ『願い』は抱いていたけれど、魔法の概念と仕組みを理解した上で実行したことが良かったのかもしれないわ。魔力が発現する感覚もわかったの。今なら他の

魔法も使えそうよ」

「本当かい？じゃあ、少し試してみようか？」

「ええ！」

私とカイルは、未だにメモに夢中なマクスター先生を置いて立ち上がり、教室の中央に向かった。

「どんな魔法にする？」

「そうね。前にカイルがやってくれたように体を浮かべてみようかしら？」

私はそう言うとともに自分の体を両手で抱きしめた。

結果を想像して、願うのよ！

前世の時だつて病院のベッドの上でいつも考えていたじゃない！空を飛びたいって！

「体を浮かべるって……あれは難しいんだよ。え？アリシア!!」

困惑するカイルの横で、魔法が溢（あふ）れ、自分の体がふわりと浮き上がるのを感じる。

……いえ、感じすぎる!! 浮き上がる体が止まらない!

魔力が出ていくのを止められない!

「キ、キャアアアアアア！」

「アリシアアアアアアア！」

バチンという音と共に、痺（しび）れるような感覚が全身を覆（おほ）った。そして、一気に体から力が抜けて、ストーンと宙を落ちていく。

「カイル！助けてっ」

どうすることもできず、床に叩きつけられるのを覚悟して、体を強張らせる。その時、グイッと強く抱きしめられて落下が止まった。

「アリシア!! 大丈夫かい! 怪我はない?」

カイルの切羽詰まった声が耳に届き、私は彼の首に腕を回して抱きついた。怖かった……

「カイル……。私、一体……」

「大丈夫ですか! 今のはアリシア嬢ですか? 私の結界にぶつかりましたね!」

「結界?」

「ええ、たまに魔法を暴走させる生徒がいるんです。この教室には四方に私の結界を張っているんですよ」

「では、アリシアは天井の結界にぶつかったということですか?」

「そうみたいです。でも一体どうしてあんな高さまで上がったんですか? 上まで五メートルはありますし、もしかしてカイル殿下がアリシア嬢を浮かばせたんですか?」

「え? 難しいんですか?」

私はマクスター先生の言葉に首を傾げた。

「もちろんです。人を持ち上げる程の魔力があるのは王族くらいです。それに、持ち上げられる側の魔力も引き出して使わないと、単独で浮かび上がることは不可能に近いですよ」

「でも、馬はもつと大きいのですわ」

馬とは、前世でいうところのオートバイのような魔道具だ。前世で使われていた名前でも、この世界ではまったく違う道具や生き物であることがままたある。

「魔道具は別です。あれは魔力を増幅して宙に浮かべているので、乗る本人の負担は少ないように作られているんです」

「でも、私は……」

私が話そうとすると、カイルがそれを遮るように私をギュッと抱きしめた。

「アリシア! そうなんです。僕がアリシアを浮かばせるのを失敗してしまいました。申し訳ありません」

「やっぱり。カイル殿下、気をつけてくださいよ。でも、大丈夫ですか? あんな高さまで浮かべたら流石に魔力が尽きかけてしまいますよ」

「はい。以後気をつけます。アリシア、君も疲れただろう? 今日はこちらで失礼しよう」

「え、ええ」

「そうですね。わかりました。私もアリシア嬢のことをレポートにまとめたいので、今日はこれで終わりにしましょう」

「はい。ありがとうございました」

カイルはそう言つて、私を横抱きにして教室から出た。

「あの、カイル。私は大丈夫よ?」

「ごめん。アリシア、少し話をさせて欲しい。いつものガゼボに向かうよ」

私の重さなど感じないかのように、カイルはスタスタと歩き出す。私は彼のただならぬ様子に黙っていることしかできなかった。

「着いたよ」

カイルの声と共に、私は、ガゼボの中にあるいつものベンチにゆっくりと座らされた。

「カイル、さつきはどうしたの？」

私は待ちきれずにカイルを聞いたです。

「アリシア、僕もまだ混乱しているけど、状況を確認させてもらおうよ」

「ええ」

「君は君自身の魔法で自分の体を浮かべた。合ってる？」

「ええ」

「途中で制御不能となつてそのまま浮かぶことを止められなかった。で、マクスター先生の結界にぶつかって落ちた。そうだね？」

「そうね。そうなるわ」

カイルが隣で黙り込んでしまう。

「カイル？ どうしたの？ なにか問題があるの？」

私はまた常識外のことをしてしまったのかと、ドキドキしながらカイルの返事を待つ。

「アリシア……。さつき先生も言っていたけれど、普通は飛べないんだ」

「先生もそう言っていたわね。でも、どうして？」

「自分を持ち上げる程の魔力を持っている人間なんて、聞いたことがない」

「けど、カイルは私を浮かせてくれたわ」

「あれだつて凄く難しいんだよ。アリシアが望んだから、僕は自分ができる精一杯の魔法を使ったんだ。だつて、君に初披露する魔法なんだよ。それだつて、自分の魔力じゃなくてアリシアの魔力も使わせてもらっているよ」

「そんな……」

「いくら魔法が暴走したとしても、自分だけの魔力であんなに飛べるなんて……。凄いんだけど、まずい……」

「どうして？」

「今回、マクスター先生は見ていなかったから、僕の魔力が暴走したことにしたけれど……王族でもない君が僕以上の魔力を持っているとわかったら、良くて研究材料、悪くて魔法研究所に連れて行かれて実験対象だよ」

「そんな……」

カイルから知らされる衝撃の事実には、絶句する。

「それくらい珍しいことなんだ。もしアリシアが自分の意思で魔法を制御できないとしたら、これからは今まで通り魔法は使えない、もしくは君が侍女にかけた程度のことしかできないということにした方がいい」

カイルの真剣な声に頷きながら、私もよく考えてみる。

確かに簡単に人が飛べるなら、みんな飛んで移動するわよね。でも、誰も飛ばないし、馬車や馬で移動している。それは飛べる程の魔力は誰も持っていないから？

私は、今になってようやく、自分がとんでもない存在なのだと理解した。

「わかったわ……。もう、むやみに魔法は使わないようにするわ」

「ああ、そうして欲しい。君の侍女にも伝えておいて。これは僕たちだけの秘密だよ」

「ええ、いつもありがとう。カイル」

「いいんだ。でも、君といると本当にもいつもハラハラしている気がするよ。大人しくしているんだよ。僕のお転婆姫」

苦笑をこぼしたカイルは、私の額にそっとキスを落とす。そのキスからカイルの心配する気持ちが伝わって、なんとも言えない気持ちになる。

「カイル、心配ばかりかけてごめんね」

私が少し俯うつむいて呟くと、カイルがしっかりと私を抱きしめた。

「前にも言ったけど、君がどんな存在でも僕は今のアリシアが好きなんだ。絶対に守るよ」

カイルの気持ちに胸が熱くなる。私は彼の背に腕を回して、不安な気持ちを吹き飛ばすように抱きついた。

・・・♣カイルの気持ち・・・

カイルは腕の中に収まるアリシアの不安を感じ取って、内心の動揺をなんとか覆おほい隠す。カイルは混乱していた。

先日、今まで自分はエミリアにうまく丸め込まれていたんだと自覚した時よりも、アリシアが転生者と告白してくれた時よりも、今、動揺していた。

それでも、アリシアが転生の話をしてくれた時、どんなに突拍子がなくとも、彼女のことを信じる決めたのだ。

そう伝えた時のアリシアの笑顔は、今まで見た中で一番嬉しそうだった。

しかし、神様はいつもアリシアに意地悪をしているように感じる。

転生者であることはまだいいが、この世界で盲目とはあまりにかわいそうだ。

前世で、目が見えていたことを覚えていて、それを赤ん坊の頃から抱えていたなんて……自分なら絶対に耐えられない。

あの時、カイルの方が泣きそうな顔をしてはたはずだ。

それなのに今度は、信じられないくらいに魔力量だ。アリシアにもその危険性は伝えたが、これは本当にまずい。

アリシアが浮かび上がった時に、マクスター先生がメモに夢中で本当によかった。もし見られて

いたらと思うと体が震える。それくらい危険なものなのだ。

当面は今まで通り魔法は使えないとしておいて、その間に制御できるように練習するしかない。制御の効かない膨大な魔力は、人を不安にさせるし、恐怖を与える。

けれど、カイルはこれからアリシアと不仲になる予定なのだ。

不安しかない。万が一にも誰かに魔力暴走を見られたら、それだけで本当に人から恐れられ、嫌われる要因になってしまう。

「カイル？」

腕の中でアリシアの瞳が不安そうに揺れる。

この美しく、優しく、強い婚約者を心から愛しているのだ。

カイルは、彼女の頬に小さくキスを落とし、必ず彼女を守ると決意を新たにしたのであった。

## 第二章 魔力暴走

～～◆アリシアと襲撃事件◆～～

私の魔力についてはパパさんにも秘密にすることとなり、私は今まで通り魔法が使えない令嬢として行動していた。マクスター先生にも魔法はあの一回しか使えなかったと報告し、先生がレポー

トを書き上げるまで、私の補習は一旦保留となった。

但し、誰にも見つからないようにカイルと魔力を制御する練習を新たに始めることにした。

そんな忙しい毎日の中、まだエミリアさんと話すこともできずにいる。

「お嬢様、もうお休みのお時間です」

「ありがとう、ケイト。あの、明日なんだけど、エミリアさんと二人で話す時間は取れるかしら？」

「お二人で……ですか？」

「ええ、どうしても話したいことがあるの」

「わかりました。エミリア様のご予定を確認して参ります」

「よろしくね」

すると、ケイトがさつと手を取って、ベッドまで連れて行ってくれた。

私は横になりながら、これからのことに思いを巡らせる。まずは、明日エミリアさんと話して転生者なのかを確認しよう。

でも、どう話したら良いのかしら？

突然前世の話なんてしたら、また変な噂が立つてしまうわよね。

「うーん」

それに、カイルの婚約破棄計画が実行されたら、もっと難しくなる。王子が婚約破棄を考えている者など、誰も相手にする筈がない。その前になんとかしてエミリアさんと話したい。

カイルに相談できる内に、なんとかしてエミリアさんが転生者であるという確証を得たい。

もし、お互いに転生者だとハッキリしたら、エミリアさんはなにもしてこなくなるかも。

私は発明には興味ないし、彼女の手柄てがらを横取りするような真似もしないと約束したら安心してくれるだろう。逆に前世のことを話せたら、また仲良くなれるかもしれないわ。

それでも、エミリアさんがなにかしてきたらどうしよう。

転生者ではなかったら？ ただ単に私が嫌いなだけだったら？

「はあ、考えることがいっぱいね」

まだ、いつ、どんなきっかけでカイルと不仲になるのかは決まっていないが、それはきっと近いうちに実行されてしまう。

不安を覚えて、ベッドのカバーを握にぎりしめたその時、寝室のドアが叩かれた。

「ケイト？」

「お嬢様、急ぎのご連絡でございます」

「え？ 誰から？」

ドアの向こうでケイトの声が響く。

「カイル殿下から通信が入っております。急用ということですが、いかがいたしましたでしょうか？」

私は上半身を起き上がらせ、ケイトに通信機を持つてくるよう伝えた。

「カイル？」

通信機に向かつて話しかけると、向こうからカイルの焦った声が聞こえてきた。

「アリシア！ 夜遅くにすまない。少し話してもいいだろうか？」

「ええ、大丈夫よ。なにかあったの？」

「ああ、今ここにカーライルが来ているんだ」

「カーライル様？」

カーライルさんは、アラカニール公爵の嫡男ちやくなんで、私の従兄いじしでもある。彼はカイルの友人で、一緒に王太子様を支えていく同志でもあるが、こんな夜更よふけに人を訪ねるような人には思えない。

不思議に思っ、私は首を傾げた。

「こんばんは、従妹姫。夜遅くにごめん」

「いえ、でも、いったいどうしたのですか？」

「コホン、まずこんな遅くに訪ねたことを詫わづびさせてほしい。実は二人がエリック達に色々依頼しているのは聞いていて、私もできる範囲で周りを観察していたんだ。カイルやエリックは最近忙しそうにしていたから、私は執行部でのエミリアをそれとなく観察していたんだよ」

「そうだったのですね。ありがとうございます、カーライル様」

「それで、最近ちょっと気になることがあつてね」

「まあ、なにか？」

「エミリアとアラミックなんだが、二人でいることが増えたんだよ。まあ、アラミックは女生徒とも気安く話すタイプではあるけど、誰か特定の女性と一緒にいることはあまりなかったんだ。だから余計に気になつてね」

「エミリアさんとアラミック様……ですの……」

ふと、先日、アラミックさんと話した時のことを思い出した。確かにあの時、彼の様子はおかしかった。

「あの、実は先日アラミック様に偶然お会いして少しお話したの。お友達が怪我をしたと言っていたから、お慰めしたわ。ただ、その時少し気になることを言っていたの」

「どんな？」

「カイルはなぜ王位を目指さないのかとか、能力があるのにもつたいないとか……」

「なんだってそんなことを？」

カイルが驚きの声をあげた。その後、カーライルさんが神妙に呟く。

「なるほど、アリシア嬢にもそんなことを……。実は私にも同じようなことを尋ねてきたんだ。ただ、言い方はもっと嫌な感じだったけどね」

「嫌な感じ？」

「言いくいけど、カイルが王位を目指さないのはアリシア嬢がいるからなのかと……」

「なっ！ どうしてそんなことに！」

カイルが声を荒らげる。そんな彼を宥めるように、カーライルさんが続けた。

「勿論きちんと否定したよ。カイルは第五王子だし、王太子様は優秀な方だから、私とカイルは臣下として支えることを楽しみにしている。ただ、納得してはなさそうだった」

三人とも黙り込んでしまった。

アラミックさんの意図はなんだろう？ エミリアさんとの関係は？

グルグル考え込んでいると、カーライルさんが口を開いた。

「それで、さつき談話室の前を通りかかったら、二人の会話が聞こえたんだ。明日は大丈夫なのか？ もう止められないとかなんとか……」

「明日？」

私とカイルは同時に呟いた。

「だから明日は二人とも大人しくしてほしい。あと、エリックにも話して護衛を強化してもらった方がいいね。ちよつとエリックを呼んでくるよ」

そう言って、カーライルさんはエリックさんのところに協力を頼みに行った。

「アリシア、大丈夫かい？」

私がポーツとしていると、カイルが心配そうに話しかけてきた。

「ええ、大丈夫よ。ねえ、カイル。アラミック様は本当にただの貴族なのかしら？ 普通は自国の王様や王太子様には敬意を払うものでしょう？ この前アラミック様がお二人を非難するようなことを仰っていたの……」

「……そうか。彼が側近候補になった時に父上に確認したが、問題はなかったよ。でも、もう一度確認してみよう」

「ありがとう」

「いや、君の勘は侮れないからね」

すると、通信の向こうからカーライルさんとエリックさんの話し声が聞こえてきた。二人一緒に

戻ってきたらしい。

「エリック、カーライルから聞いてくれたか？」

「ああ、それは聞いたが俺はお前の護衛も兼ねてこの学校にいるんだ。あまり勝手に動くなよ！」  
カイルの声が続いて、エリックさんのちょっと怒った声が聞こえた。

「ああ、わかつてる」

「とにかく警備体制も見直したいから、明日は俺のそばを離れないようにしてくれ。部屋に閉じこもるのもいいと思う」

エリックさんの言葉に私は思わず声をかける。

「エリック様、私は大丈夫ですわ」

「えっと……アリシア嬢？ 通信か？」

「ええ、そうです。エリック様、エミリアさんがなにかを企んでいるのなら、それはチャンスですわ。エミリアさんの次の一手がすぐわかるということでしょう？ ターゲットの私達が部屋から出なかつたら、なにも起こらないかもしれない」

「それはそうだけど、僕は心配だよ！」

「アリシア嬢、確かにチャンスではあるけれど、部屋から出ない方が絶対に安全だよ」

カイルが大きな声で私の言葉を遮った。カーライルさんも心配げに話す。

「でも、みなさんもエミリアさんのことが気になっているのでしょ？」

「アリシア嬢、だが……」

エリックさんが更になにかを言おうとしたところを、カイルがため息を吐いて止めた。

「エリック、こうなったらアリシアは止められないんだ。きっと部屋にいろんと言つても一人で出歩いてしまう」

「なっ！ やつぱりアリシア嬢は……なんというか……勇気がある……かな……」

「無謀とも言うけどね」

エリックさんの呆れ声が続いて、カーライルさんの少し怒った声が聞こえてきた。

私はしょぼんとして、小さな声で「ごめんなさい」と呟いた。見かねたカイルが、「しようがないな」と囁いてから、エリックさんとカーライルさんに話す。

「ありがとう、二人とも。でも、アリシアの提案もありかと思うんだ。確かにこんなに早く動いてくれたら御の字だ」

「でも、狂言とはいえアリシア嬢との婚約を破棄する作戦もあるだろう？」

「ああ、それくらいしかエミリアを誘き出せそうにないと思つていた。でも、明日、エミリアがなにかを仕出かしてくれたらその必要もなくなる」

「そうは言つても難しいよ。エミリアは今までも尻尾を出してないし……アラミックがどういうつもりなのか見当もつかない」

「明日なにも起こらなかつたら、やはり不仲作戦を実行するしかないな。でも、まだ、みんなが納得するきっかけが掴めないんだ」

カイル達三人は既に明日以降のことについて考え始めた。

次から次へとアイデアや意見が飛び交い、彼らが本当に信頼し合っているのだと感じる。「しかし、婚約を破棄するくらいで尻尾を出すかな？」

カーライルさんがポツリと呟いた。

その不安を振り払うようにカイルの明るい声があるのをまとめる。

「それは僕も不安ではある。しかし、ただ待っているだけじゃしょうがないだろう。それより本当にアラミックはこの件に関わっていると思うか？」

カイルの普段から想像できない厳しい声に私は思わず息を呑んだ。

「報告した通り、二人が明日なにかをすると話していたことを聞いたただだからなんとも……。残念ながら細かい計画まではわからない。ただ、あの雰囲気だと、良いことではないと思うよ」

カーライルさんが残念そうに話す。

「アラミックか……。悪い！ 最近王都の方ばかり調べていて執行部に顔を出していないんだ。まさかアラミックがとは思うが、エミリアの時もそうだったからな。ありえない話じゃない」

エリックさんも悔しげに声をあげる。

「気にしないでくれ、エリック。とはいえ、やはりアラミックについてはもう一度調査したいな。

身元は確認しているが、アリシアも不審に思うことがあったようだし、念には念を入れたほうがいいだろう」

「……わかった。明日の警護はエリックに任せて、私は王都でアラミックについて確認してくれるよ」

「ありがとう、カーライル。そうしてもらえると助かる」

「ありがとうございます、カーライル様。私も疑いたいわけではないのですが、やはりこの間の言葉が少し気になってしまっ」

「大丈夫だよ、従妹姫。父上に聞けばなにかわかるだろうからね」

「叔父様は外務大臣ですものね。隣国のことにもお詳しいわよね」

そうして、私達はその日の話を終わりにした。時計を見ると結構な時間になっていたが、頭は冴えている。

明日はエミリアさんと話そうと思っていたけど、無理そうね。これではいつまで経ってもエミリアさんの転生者（仮）の（仮）が取れないわ……

私は大きいため息を吐いて、天を仰いだ。

翌朝、私は眠たい目をこすりながら、気だるくベッドの上に半身を起こす。

結局昨夜は心配したり、緊張したりしてなかなか眠れなかったのだ。

「ケイト、起きたわ」

私が呟くと、ドアの開く音とともに紅茶の良い匂いが漂ってきた。

「おはようございます。お嬢様。昨夜は寝つきが悪かったようですので、眠気覚ましの紅茶をお持ちいたしました」

ケイトはそう言うと、私の手にカップを渡してくれる。温かい紅茶を一口飲むと、身体中が目覚

めるような感じがする。

「ありがとう。ケイト」

いつもよりゆっくりとベッドで過ごしてから起き上がる。

朝の支度が終わり、ケイトが私の手を取った。

「お嬢様、防御魔法を」

「そうね。お願い」

「はい。承知いたしました」

ケイトが手の甲を撫でると、フワリと魔力が体を包む。

彼女は私の持つ膨大な魔力のことを知っているはずなのに、恐れるでもなく、全く変わらない。本当に優秀な侍女なのだ。

それから私は女子寮のドアから出て、既に来ているであろうカイルを捜してキョロキョロと頭を動かした。

「カイル？」

「……ああ、ごめんよ。アリシア、僕はここにいるよ」

やっとカイルの声が聞こえて、私はにっこりと微笑んだ。

「おはよう、カイル」

「おはよう、アリシア。じゃあ、行こうか。今日はなにがあるかわからないから、絶対に僕から離れないこと！ いいね？」

不安はあるが、エミリアさん達の計画に乗る提案をしたのは私なのだ。気合を入れて返事する。

「ええ！ わかったわ！」

カイルは軽く息を吐くと話を続けた。

「あとアラミックの件、今カーライルに調べてもらっているよ。後で一緒に報告を聞こう」

「ありがとう、カイル」

それから、私達はなるべくいつも通りに過ごした。

しかし、予想に反して何事もなく一日が過ぎていく。

授業も終わり、今日はこのままかと少し気を抜いて、休憩するために談話室を訪れた。

その時、事件は起こった。

「きゃーっ!!」

私達が談話室に入り席に座ると、入口の方から悲鳴が聞こえたのだ。私は何事かと立ち上がり、声の方に顔を向ける。

「何事だ！」

隣からカイルの厳しい声と共に剣と剣がぶつかる音が響く。次いで、エリックさんの鋭い声が耳に届いた。

「カイル！ アリシア嬢！ 避難してくれ！」

「アリシア、こちらに——」

カイルが私を呼ぶのを遮るように、聞いたこともない男の声はすぐ近くで聞こえた。

「たかが第五王子が粹<sup>いと</sup>がつてんじゃねえ!!」

「え? きゃあああつ」

「アリシア! 不味<sup>まず</sup>い! 攻撃魔法を使う気だぞ」

突然叫んだ男は、あろうことかこの談話室で、騎士団以外は使用が禁止されている攻撃魔法を発現しようとしているらしい。恐怖に比例するように、自分の中で魔力が膨張していく。

「駄目……。制御が……。できない。カイル!!」

体がゆっくりと熱くなる。魔力が出口を求めて暴れているようで、息苦しい。

私はさすがのようにカイルの背中を掴<sup>つか</sup>んだ。

「アリシア! ……つ、駄目だ! 気持ち落ち着けるんだ!」

カイルが振り向いて、私の両腕を掴<sup>つか</sup>んだが、私の魔力は今にも溢<sup>あふ</sup>れ出そうとしている。

だ、ダメ……。駄目……。だめ……

必死に抑え込もうとするが、身体が緊張してうまくいかない。

そして、次の瞬間、体内で張りつめていた魔力が弾けたのがわかった。

「全員防御しろ! 魔力暴走だ! 逃げろ!!」

カイルが、大きな声を出したと同時に私の魔力が溢<sup>あふ</sup>れ出す。

暴走した。暴走してしまった……

あまりに突然のことについていけず、茫然<sup>ぼうぜん</sup>と立ち尽くす。

辺りは雷のような激しい音に包まれた。次に大きく室内が揺れ、私の周りから音という音が消

えた。

魔力を出し尽くした体から力が抜けて、私はガクリと崩れ落ちる。倒れる前にカイルがしっかりと私を抱きとめてくれる。彼の体温だけを感じ、なにも聞こえない。

しばらく静寂<sup>せいじやく</sup>に包まれた後、悲鳴と共に一気に音が溢<sup>あふ</sup>れ出す。

「きゃああああああ!!」

「助けて!!」

「逃げろ! 魔力暴走だ!!」

周りからバタバタと人々が走り去っていく。その様子から大変なことになってしまったと察した。

「カイル……。どうしよう」

——やってしまった。カイルにあれば他人には知られてはいけなと言われていたのに。でも、どうしてこんなことになってしまったのか、自分でも理由がわからない……

最早、誰かが襲ってきたということに恐怖するよりも、私の魔力が暴走したこの方に慄<sup>おの</sup>いていた。

全身から血の気が引いていき、手先が細かく震える。瞳から涙がはらはらと流れ落ちた。

「大丈夫だ。アリシアは大丈夫かい? 怪我<sup>けが</sup>はない? 歩けるかい?」

「だ、大丈夫……」

カイルはギュッと私を抱きしめると、手を離してマリアを呼んだ。

「アリシアの護衛だな。早くアリシアをこの場から避難させてくれ」

「はっ！」

私の周りに素早くケイトとマリアがやってきて、私の手を取った。

しかし、カイルと離れることに不安を覚え、彼の名前をすがるように呼ぶ。

「カイル！」

「今は一旦部屋に戻るんだ。ここは危険すぎる」

私は混乱していた。状況がわからず、手を引かれるまま歩き出す。

いつもとは違い、ケイトは何度も立ち止まり周りの様子を確認し、マリアも私にびったりと寄り添い部屋に向かった。

「ケイト、いったいどうなったの？」

「お嬢様、とりあえずは寮のお部屋までお静かにお願いします。少し早足で移動いたします」

それだけ言うと、ケイトは更にスピードを上げて、なにかから逃げるように寮に戻った。

いつも穏やかな彼女が緊張した空気を放っているの、私はなにも言えず、手を引かれるまま部屋に戻るしかなかった。

部屋に戻ると、私はたまたまケイトに先ほどの件について尋ねた。

悲鳴と剣の音、男の声に……私の魔力の暴走。それしかわからない。周りの状況が知りたかった。

ケイトはまず、私達を数人の生徒が襲撃したことを教えてくれた。

「襲ってきたのは誰だったの？ カイルは？ みんな無事？ ケイトは怪我はない？ マリアも大丈夫だった？」

心配が胸を覆い、気が急ぐまま矢継ぎ早に質問する。

「全員無事でございます。犯人達もマリア達護衛が既に取り押さえました」

私は一旦深呼吸をすると、一番聞きたかったことを確認する。

「えっと、私の魔力は……？」

「……暴走いたしました……」

「やっぱり……それで、その時の状況はどうだった？」

意を決して尋ねるが、ケイトはなかなか口を開こうとしない。

戸惑い、言いあぐねているのが伝わってきて、それが私のしでかした魔力暴走がいかに凄まじいものだったかを物語っている。

私はケイトの手を掴んで懇願する。

「ケイト、話して！ お願い」

「……最初は、爆風のような強い風が……談話室を襲って……」

「それで……どうなったの？ 誰か怪我は？」

「そ、それは大丈夫だと思います！ お嬢様の近くにはカイル殿下と襲撃者、そして、私共しかおりませんでした。襲撃者は倒れましたが、私達はきちんと防衛魔法が働いて傷一つございません」

「カイルも？」

「勿論でございます。カイル殿下もご無事です。カイル殿下が暴走の瞬間、周りに結界を張られたようです。ですから被害は最小限に抑えられたのだと思います」

「そう、よかった……。よかったわ」

自分の引き起こした魔力暴走で、仲間の誰も怪我しなかった。

その事実には安堵のため息を吐いた。誰かが怪我していたらと思うと……恐怖で体が震える。

「アリシアお嬢様……」

ケイトが心配そうな声と共に、温かい手で私の背中を撫でる。そのおかげで、私は少しずつ冷静さを取り戻した。

「……この襲撃はエミリアさんが？ アラミック様もあの場にいたのかしら？」

「それはまだわかりません。犯人は、カイル殿下に不満を持った学生達だったようですが……」

「カイルに？」

「それは仕方がないと思います。なにをやるにしても、反発する者はおりますので。ただ、気になるのはその犯人の様子が、理性を失っているように見えたことでございます。こちらはわかり次第カイル殿下がお知らせくださるそうです」

「ありがとう、ケイト。その、悲鳴が聞こえたのは襲撃者のせい？ それとも私の……？」

すると、ケイトが言いにくそうに話してくれた。

「アリシアお嬢様、あれだけの魔力を持つ者はそうおりません。大きすぎる力は恐怖の対象になってしまうものです」

ケイトはとても遠慮がちに教えてくれた。

「……最悪ね」

ぼつりと呟いた言葉は、自嘲的な響きを帯びて、重苦しい空気の中に溶けていった。

・・・♥エミリアの策略♥・・・

カイル王子とアリシアが襲われた事件の数週間前。エミリアがいる空き教室のドアが開き、一人の男が入ってきた。

その男はエミリアの方に歩いてきて、人の良さそうな笑みを浮かべる。

「エミリア、突然呼び出してどうしたんだい？」

ドアから入ってきたのはアラミックだ。

エミリアには日本人女性として生きた前世の記憶がある。

ある日、ふとその記憶を取り戻し、今自分が生きる世界が、前世ではまっていた小説にそっくりだということに気付いたのだ。

確か、その小説の主人公の名前も自分と同じ『エミリア』。

物語の内容を思い出しながら、様々な発明を披露すると、エミリアの実家は瞬く間に富を築き、彼女自身も人々から尊敬を集めた。そうしているうちに、いつしかエミリアの目的は、物語の主人公の行動を追体験し続けることになっていった。

そんな折、悪役令嬢アリシアが聴講生として学校に編入してきた。おそらく物語の強制力が働いたのだろう。エミリアはこのチャンスを最大限に利用したかった。